

陳舜臣さんを語る会通信

NO.64

Apr. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年4月1日

連作短編集、もう一冊『神戸異人館事件帖』

本通信第63号で、連作短編集3冊、『柊の館』、『青春の烙印』、『漢古印縁起』を取り上げました。本号では、同じく、連作短編集『神戸異人館事件帖』を紹介します。このほか、陳舜臣さんの連作短編集としては、第53号で取り上げた『長安日記 賀望東事件録』があります。

徳間文庫版『神戸異人館事件帖』（1986）は、初出、『ゴキゲン・ハウス物語』という題で、『週刊小説』に1977年4月1日号から78年7月7日号迄、連載され、1979年、実業之日本社から単行本化されるとき、収録作品の一つの題をとって『夏の海の水葬』と改題されています。（編集委員 橘雄三）

《1. 舞台、登場人物》

【登場人物】

『神戸異人館事件帖』は10話からなり、各話共通の登場人物は沖田源太郎と楊天平、そして「私」です。

●沖田源太郎 通称、オキゲンさん。現役時代はイギリス系の商事会社、エルウィン商会に勤務。

●楊天平（ヤンテンピン） 通称、ヤンさん。江蘇省出身。上海航路のcockから神戸の杏花楼という料理店のcockを経て、フリーのcockに、という経歴をもつ。

●私 作者の分身。狂言回し。

三人の出会い、再度山の谷道沿いの茶店。各話、この茶店で語り合います。引用します。

「好敵手ですね」 あるとき、私がそう言うと、オキゲンさんはさりげなく、「そらそうや。もうこの人とは五十年近くも将棋さしてまんねや」と言った。「五十年も?」「五十年にはちょっと足りんわな。…四十年以上はあるやろ。いっしょの家に住んでたんや。上と下にな。この人に将棋教えたン、この私ですがな」（徳間文庫版 p. 8）

再度山の茶店という、登山道をほぼ上りきったところにある燈籠茶屋が思い浮かびますが、作品に描かれている「再度山の谷道ぞいの小さな茶店」となると稲荷茶屋かと思えます。編集委員撮影。

現在の稲荷茶屋。谷道の右、木陰に、テーブル、床几を置き、飲食できる場所がある



■二十代半ば、二人は、ヒルサイド・ホテルの横の路地をはいた、ちっちゃな木造の洋館に住むことになる。その時、家主のエルウィン商会神戸支店の支配人が真鍮の門標をプレゼントしてくれた。

その門標は「GOKIGEN HOUSE」となっていた。支配人は、「オキゲン」という発音ができず、いつも、「ゴキゲンさん」と呼んでいたのだ。

それ以来、二人が同居したその洋館は、「ゴキゲン・ハウス」と呼ばれるようになった。

《2. 作中時間、時代背景ほか》

作中時間は1977、78年で、当時、七十前後の沖田源太郎と楊天平が、二十代半ばだった1933年から数年の出来事を回想し、五十数歳の「私」が聞くという構成になっています。

【時代背景】 引用します。

一九三一年(昭和六年)から一九四五年(昭和二十年)まで、すなわち柳条溝で満州事変が勃発してから、太平洋戦争なるものが終了するまで、「十五年戦争」と名づける歴史学者がいる。たしかに十五年間の戦争であったが、政治意識のあまり高くない庶民の感覚では、そのあいだ三、四年ほど休憩の時期があったような気がする。

オキゲンさんこと沖田源太郎老は、彼の一生でもっとも暮らしやすかったのは、まさにその中休みの時期であったという。（p. 7）

それは彼らの青春時代が重なっているのである。

（p. 180）

ヤンさんやオキゲンさんが、満州事変の戦火がおさまって、蘆溝橋事件が発生するまでのあいだ、昭和十年前後を『黄金時代』と呼んだのは、いささか問題があるようだ。それは小康状態にすぎず、血なまぐさいものが、彼らの見えない底に流れていたのが現実であった。（p. 274）

■上の文中の「蘆溝橋」は、広辞苑では「盧溝橋」。

『神戸異人館事件帖』 各話内容(1) 及び補足

『神戸異人館事件帖』各話内容(1)

知らぬ間に	に死体が	バーナード・ショーのからみ、ショーの短い日本滞在という事実をうまく使いこなして、見知らぬ死体がベッドにあったという猟奇的な一篇を構成している。文中に挟まれた魯迅の短文も効果的だが、ショーの風貌が目に見えるようで、どこかおかしい一篇である。導入部はショッキングであるが、後半、どんでん返しとなる、そのどんでんがユーモラスで、明るい。(田辺聖子)
ひょうたん男	ひょうたん男	「ひょうたんの杉田」と呼ばれる男がいた。部屋には見事なひょうたんが一つあるだけだったからだ。彼は、失業者と言いながら、ちゃんとした身なりで、屋台とはいえ、串カツをつまんで、のんびり酒を飲むような生活をしていた。しかし、裏では、高利貸しの厳しい取り立てにあっていた。杉田は、完璧と信じるアリバイを工作し、高利貸しを惨殺する。このアリバイ工作にひょうたんが絡む
消えて	消されて	上海から神戸港に着いた上海丸の荷物から、トランに詰められた全裸の美女の死体が見つかる。死体の女性は、断髪、半纏足であった。舞台は、1933年の上海に。まず、当時の上海の共同租界の様子が詳述される。事件は、そこに住む張というサディストの大富豪邸で起こり、彼に買収されたフェルナンド夫婦が絡んで進展する。フェルナンドの妻・陸芳が広東の梅県出身ということが事件を解く鍵に
ひんやりしたキス	ひんやりしたキス	これは、当時の中国の政情を背景にしている。私はこの話のかるやかタッチを、ことに愛する。李瑞美という美女が、忽然とヤンさんの前にあらわれる。教養ゆたかな留学生である。革命運動で捉われた同志にに巻ずしを差し入れてほしいという。中国へ送還される中国青年が巻ずしが好物というの、妙なりアリティがあっただけで、ヤンさんは同じ中国人として、「愛国青年」に共感を寄せている。喜んでその役を引き受けるのである。美人学生の瑞美はそのお礼に、ヤンさんにキスする。とっさのこととて、ヤンさんは、「ひんやりした感じがしたようや」という印象しかない、ところがそのあと、ヤンさんに惚れているミルクホールの女給ヨシコの嫉妬から、とんだことに…。(田辺聖子)
夏の海葬	の海水葬	オキゲンさんに、沖田弘助という三高生の従弟がいた。オキゲンさんは、新聞で「京大事件(滝川事件)」の記事を読み、従弟を心配した。赤狩りといわれ、左翼陣営への弾圧が激しさを増していた、そんな時代のできごとである。従弟にガールフレンド姉妹が絡み話は展開する

《補足1. 徳間文庫版、田辺聖子さんの「解説」》

徳間文庫版『神戸異人館事件帖』(1986)に田辺聖子さんが「解説」を書いている。興味深いので、少し引用します。

それにしても、私は、この本でつくづく思ったのだが、推理小説の幅は広く、また、奥ふかいということである。人が殺され、動機は、解決は、というのだけが推理小説ではない、血が流れなくても、なぞときとどんでんの興味は尽きない。大人のたのしみは底深い。〈たとふれば黄河のごとしはろばろときわまりもなく流れ続ける〉黄河は推理小説の面白さでもあれば、作者

陳舜臣さんご自身の持たれる大らかなお人柄でもあるのだ。

上の表、各話の内容にも、「知らぬ間に死体が」「ひんやりしたキス」「一応の終わり」の三話、田辺さんの文章を使わせていただきました。

《補足2. 「消えて消されて」広東省梅州市客家の村》

第八話「消えて消されて」■神戸港に着いた船の荷物から、トランクに詰められた全裸の美女の死体が見つかる。ところで、死体の女性には、「半纏足」という身体的特徴があった。

一方、上海共同租界の警察は、聞き込みから、その死体が九分通りフェルナンドの妻・陸芳で間違いないと決めつけ、犯人を追う。ところが、陸芳は広東の梅県出身の客家で、客家には纏足の習慣がない。

梅県は、ほぼ百パーセントが客家で、華僑として海外で活躍する人が多い。今は梅州市に属する。

下の画像は梅州市郊外、客家の村。編集委員撮影。



『神戸異人館事件帖』 各話内容(2) 及び補足

『神戸異人館事件帖』各話内容(2)

牛肉と	ダイヤモンド	オキゲンさんの勤めていたエルウィン商会は、船会社の代理店のほか、宝石のような小さいものから、牛肉、更には生きた牛に至るまで、貿易業を手広く営んでいた。ところが、宝石の輸入関税が桁違いに上昇したこと、また、牛の産地で治安が悪化したことから、エルウィン商会における、これらの取扱量が激減していた。そんな時期、まずオキゲンさんに、知らぬ間に密輸の片棒を担ぐことになる出来事がおこる。虫歯に悩んでいたオキゲンさんは、エルウィン商会の支配人・ギルバートから、ドイツ人の美人歯科医を紹介されるが…。続いてヤンさんも、こちらは不法行為とまではいえないが、エルウィン商会の貿易にかかわることになる
楽しい	同居人	プラタープというインド人青年がゴキゲン・ハウスの住人となった。彼はボンベイの大富豪の息子で、日本文化研究のため来日して、すでに三年あまりになるという。オキゲンさんもヤンさんも、「プラちゃんに二階に来てから、なんやら急に人生が明るくなった気がしたもんですわ」と口をそろえる。日をおかず、隣に、スザンナというすごいべっぴんのユーラシアン(ヨーロッパ人とアジア人のハーフ)が引っ越してきた。ここで、当時のインドの政治状況が詳述される。さて…
にせもの	天才	ゴキゲン・ハウスの近くに、毎晩店を出す、夫婦の串カツ屋は、かみさんがなかなかの美人で愛想がいいというので人気があった。ゴキゲンさんもヤンさんも、その常連だった。「わしら、一回、人生の裏表やってみますねん」という山倉時平夫婦であったが、ゴキゲンさんもヤンさんもその深いわけを知らなかった。ただ、山倉が、正真正銘の日本画を二枚つくり出す「飛行機」という技術をもっているということは本人から聞いていた。「私」は偶然、知り合いの表具師の話から、山倉時平夫婦の若い時代を知ることになる
はなやかな闇		ヤンさんの「藍衣社が来よったんや」ということばでこの話ははじまる。藍衣社(らんいしゃ)とは、蒋介石の独裁政治の樹立とその維持を目的とする国民党内のファッショ的特務機関のこと。蒋介石は江西省瑞金にあった共産党の根拠地に対し第五、六次の攻撃をかけていた。1934年には、共産党は瑞金を捨て、「万里の長征」に出る。当時、神戸に在留する華僑は出身地別に同郷会のような親睦相互扶助の団体を持っていた。そんな一つに、江蘇、浙江など、揚子江下流地方出身の人たちで作る三江公所という組織があり、江蘇出身のヤンさんはここに所属していた。ヤンさんは、その三江グループの顔役に頼まれ、林承閣という人物をゴキゲン・ハウスに泊めることになる。さて…
一応の終わり		私は、ヤンさんとオキゲンさんの友情のあかしというような、この話が、おかしくて好きだ。新婚のオキゲン青年の邪魔をしないために、別荘へ入ってるつもりで、水上警察署の留置場へ、ヤンさんは連れられていく。すべて、オキゲンのためやと信じ、「牢屋にはいってみるのも、話のタネやな」と笑いながらヤンさんは一人部屋へ入れられる。その真相を、戦後、オキゲンさんは、はじめてヤンさんにうちあける。オキゲンさんも、もう一人の友人、三木も、ヤンさんを愛し、日本にとどまっていたほしいための、ある事実を隠したお芝居だった。ここには、あったかいどんでん返しがある。(田辺聖子)

《補足3. 第九話「はなやかな闇」、中国の政治状況》

蒋介石はソビエト地区を包囲し、いわゆる「^{いそう}圍剿」という形をとって、包囲討伐戦を進めていました。

まさにこの時、1931年9月18日、瀋陽で日本軍の手による「満州事変」が起る。蒋介石は、急遽、討伐戦を打ち切って南京へと引き上げます。

31年11月、瑞金の葉坪村で中華蘇維埃第一次全国



瑞金にある中華ソビエト共和国臨時中央政府旧址
編集委員撮影

代表大会が開催され、大会後、毛沢東を主席とする中華蘇維埃共和国臨時中央政府(左下画像。34年2月に「臨時」呼称をとる)が発足します。

それを促した力が、「満州事変」という外からのものであったとはいえ、これまでの根拠地の連合体—ソビエト区が成長して、一つの中央政府をもった国へと結実したのです。

《補足4.『夏の海の水葬』

表紙》

初出：週刊誌連載時

『ゴキゲン・ハウス物語』

単行本：実業之日本社 1979

『夏の海の水葬』

文庫本：徳間書店 1986

『神戸異人館事件帖』



2022年2月23日付神戸新聞記事「日々小論 桃源忌」

2022.2.23
日々小論

桃源忌

論説顧問 三上喜美男

作家の陳舜臣さんが亡くなって、今年で7年になる。

命日の1月21日は小説「桃源郷」にちなみ「桃源忌」と命名された。同じ大阪外国語学校現大阪大外国語学部出身で作家仲間だった司馬遼太郎さんの「菜の花忌」（2月12日）と比べ、故郷の神戸でもあまり知られていないのが残念だ。

司馬さんは北の大地に思いをはせてモンゴル語を学び、陳さんは母語の中国語でなくインド語科に進んで、ペルシャ語も習得した。ともに中国の歴史を学びつつ多民族が勃興したユーラシア大陸へと関心を広げた。

「桃源郷」は中国の詩人、陶淵明の「桃花源記」にある理想郷である。陳さんの小説は騎馬民族の王朝・遼から、桃源郷の謎を絡めてインド、中央アジア、中東、欧州へと展開する。

漢族、契丹族、日本人、ペルシャ人など異なる民族や宗教が

織りなす歴史絵巻は、中国、台湾、神戸のルーツを大切にし、コスモポリタン（国際人）を自認した陳さんだからこそ描き得た世界だろう。

執筆は21世紀を迎える前後の時期だった。大病を患い、阪神・淡路大震災で被災した陳さんは、「違いを認め合って共生できる社会こそが理想郷」と言い続けたのではないのか。

中国の文化を学ぶ神戸舞子学院（神戸市垂水区）で陳作品を読む会を開く橘雄三さん(79)は「明石市には、『陳舜臣さんを語る会』の情報をネットでも発信している。今年の桃源忌に記念行事を考えたいが、コロナ禍で断念せざるを得なかった。

神戸港にある「陳舜臣アジア文藝館」も運営の事情で休館状態にある。ぜひ再開してほしい。来年の桃源忌には、陳さんの写真を中心とする展示が語らう場になればいいのだが。

【新聞記事の補足】

昨年末、三上喜美男氏から、私（橘）が発行している「陳舜臣さんを語る会通信」を見たと言った。電話があった。以来、四回ほど、電話で取材を

受けました。

三上氏は神戸新聞社の論説委員長を務められた方です。陳舜臣さん並びにその著作に興味、関心をお持ちで、「桃源忌」を「菜の花忌」並みにとの思いがあるようです。

【新聞記事の補足（続）】

記事中の傍線は編集委員

電話取材に際し、私は事実をきちつと伝えましたが、「中国の文化を学ぶ神戸舞子学院で陳作品を読む会を開く橘雄三さん」の箇所は誤解を招きます。私は一会員に過ぎません。訂正しておきます。

また、記事で、傍線（前の方）の「陳舜臣さんを語る会」の情報ですが、これについては、本通信第71号の3、4面に詳しく説明していますので、そちらをご覧ください。

続いて、傍線（後の方）の「陳舜臣アジア文藝館」について補足します。

陳舜臣アジア文藝館は、旧神



書斎を再現したスペースで、愛用した机の前に座る陳舜臣さん（陳舜臣アジア文藝館（撮影：三上喜美男））

戸税関メリケン波止場庁舎の三階にできました。二〇一四年五月六日のプレオープンに向け、三月、四月、私たちボランティアは大活躍しました。エレベーターがないので、重いロッカー、書架、書籍を人海戦術で運び上げました。八年前のことです。

また、オープンしてからは、ボランティアが順番で受付しました。

でも、現在、休館中のようにです。ホームページにはアクセスできるのですが、残念ながら、内容は、二〇一七年末から、更新されていません。



■右の画像は二〇一四年五月八日付神戸新聞
■上の画像は「陳舜臣アジア文藝館」の玄関